

沖縄の6月を伝えたい

沖縄の歴史と平和を祈る旅のレポ

越教組ニュース

越谷市教職員組合
情宣部
16.07.12(火)
Tel 988-3281
Fax 988-3283

沖縄で二十歳の女性を元アメリカ海兵隊員が暴行・殺害した事件を受けて、六月十九日、主催者発表で六万五千人が参加する集会が開かれました。この集会はテレビなどで放映はされましたが、沖縄の「六月」に対する思いはもつと深いところにあるようです。この時期「沖縄の歴史とアートを学び、平和を祈る旅」に参加した越教組OBが、私たちの「生の様子をぜひ」という要請にレポを寄稿してくれましたので紹介します。

集会に静かに深い悲しみと怒り

沖縄での記憶に新しい大事件……。元米兵による二十歳の女性虐殺遺棄事件です。沖縄には、私がそれまでに感じていた何倍、何十倍もの怒りと悲しみがありました。

沖縄訪問最終日(六月十九日)は、沖縄県民大集会の日でした。私たちは迷わずにその集会に参加しました。道路が渋滞で、ぎりぎりの到着になっていました。もあり、会場の奥武山(おうえま)陸上競技場は、すでに人々で一杯でした。この日は快晴：炎天下、被害者に弔意を表す黒っぽい服装に身を包んだ参加者は、主催者発表で六万五千人を数えました。沖縄の歌手の歌が終わり、参加者全員で黙とうをささげた後、アピールが続きました。「事件を防げなかったことが無念だ」「いつか、何名の犠牲者を出したら苦しみがわかるんだ」等々。被害者のお父様からの手紙も読まれました。お父様は、「ご遺体の遺棄現場の前で「一緒に帰ろうね」と声をかけ「なぜ娘だったのか、なぜ殺されなければならなかったのか」と苦しい胸の内を語る一方で「娘のために皆さんが悼んでくださり感謝しています」と、口にされました。アピールの間、うなずき、肩を震わせ、目頭を押さえている多くの方々いるが一方で、アピール以外の音声はほとんどありません。泣き声さえも聞こえない、静かで深い、そして強い悲しみと怒りが、息苦しくなるほど伝わってくるのでした。

「(被害者は)私だったかもしれない、私の友だちだったかもしれない」「(再発を防ぐには)パトカーを多くすればいいということか、護身術を身につければいいということか」との被害者と同年代の若者のアピールにも胸が痛みました。「基地をなくしてというのは、わがままなんですか」という絞り出すような問いかけがありました。県外から沖縄の大学で学ぶ学生は「長年、沖縄に基地を押し付け続けている自分分は、加害者かもしれない」と言っていました。最後は、翁長沖縄県知事のアピールでした。被害女性とご家族へのお悔やみの言葉から始まり、「二十一年前(十二歳の女子小学生への米兵暴行)に二度と繰り返さない」と誓ったのに、何も変わっていません」と、「痛恨の痛み」と言葉を続けました。

抗議行動は、辺野古から

六月十七日金曜日沖縄県民広場、午前十時発の「しまぐるみグループ」のチャーターバスに乗り、辺野古のテント村に向かった。窓の外は、美しい青い海がどこまでも水平線を見せていた。那覇市は沖縄の南部にあるが、辺野古は名護市にあり北部に近い。バスで、およそ一時間半、バスは抗議テント村に着いた。テント村は、以前より人も人が少なく感じられた。海上には何もなくなり、警備艇が一隻あるだけだった。しかし海底には、七〇余りのコンクリ

「日米地位協定を見直さない限り、凶悪事件は続く」「安倍首相は、辺野古移転が唯一の解決策と言っているが」「心を一つに、強い意志と誇りを持ってこの壁を崩そう」と力強く呼びかけると、会場に大歓声があがりました。集会の終わりは司会の呼びかけで、全員が「怒りは限界を超えた」「海兵隊は撤退を」と書かれたプラカード(会場入り口で配られた)をかかげました。高齢の方、小さな子どもを含めた家族連れ、若者、老若男女が、同じ思いで集まっていることがひしひしと伝わってきました。(Yさん)



中に、映画「標的の村」に登場した「ふみおぼあ」がいらした。また、元気に選挙の応援に出かける山城博次さんの姿もあった。まさに「不撓不屈」を感じさせる方々だ。日ごろの生活上に基地問題や危険なことがたくさんある。それらへの問題意識や抗議活動は、生活の一部となっていて、長い視点でゆっくり、楽しく、生きながら闘っていると感じた。幸福が無い降りてくる神が住んでいるといわれているガジュマルの木が、青々と大きく根を張っていた。(Mさん)

沖縄の6月を伝えたい

沖縄の6月は慰霊の月…小学校訪問

六月の沖縄は慰霊の月です。

六月十九日(日)那覇市立上間小学校は学校公開日です。この日の三校時は、体育館で「平和を考える集会」が全校で行われました。

私たち「沖縄の歴史とアートを学び、平和を祈る旅」の一行は、この集会に参加する機会を得ました。集会では「おきなわ」島のこえー」小峰書店発行(丸木位里、俊作・絵)の朗読劇を、私たちと一緒に行かれたアローンシアターの谷英美さんが行うからです。

日曜参観に行く

体育館は四階で、私たちも子どもたちと一緒に移動しました。体育館後方には、シルバー席用のもすでに集まっています。六月の沖縄はとても暑く、風通しはよくありませんが、子どもたちは学年ごとに床に座っていました。

集会は、全校合唱「HEIWAの鐘」で始まり、その後、絵本のなかの絵を大きくしたものを舞台に並べて、朗読劇が始まりました。その中で、校長先生自ら、衣装を付けて三線をひいておられました。校長先生が舞台の端に出てくる

と、子どもたちが小さい声で「校長先生だ。」と言っていたのが、聞こえ、ほほえましく思いました。

朗読劇の後、五、六年生が呼びかけを行いました。その中で、一年生から六年生までが、学年に応じた「平和宣言」を発表しました。

「平和宣言」は大きな短冊に書かれ、体育館の舞台右側に貼ってありました。一年生は「ともだちとなかよくします。」、六年生は「明るい平和な未来をつくれます。」というように、そして、五、六年生で、「二度と戦争はしません。」と呼びかけました。

最後に、沖縄の生んだ宮良長包(沖縄では有名な音楽家)氏作曲の「えんどうの花」をみんなで歌いました。そして、校長先生は、六月二十三日のことを話され、「戦争のない平和な世界」を築くことを伝えました。

帰るとき、図書館の前には、沖縄戦から戦後の沖縄のことを伝える大きな掛け図が貼ってあり、戦争と平和を伝える本の紹介もありました。

このように、沖縄の学校では、六月の慰霊の日を考える行事があることがわかりました。そこに参加できたことは、貴重な体験でした。(Hさん)